

## 〈文学史〉への志向

太 田 善 磨

およそ人間が〈文学〉を体験としてもつのに二様のあり方があることは、古くから指摘されている通りである。それは、言うまでもなく、創造・制作的な体験と享受・鑑賞的な体験の両者である。この両面は、ひとり文学的体験においてのみ見得るものではなく、いわば「魂の根本形式」とでも称すべく、学問とか芸術とか以前の問題として、行為と観照、形成と享受という態度が、人間存在とともに予想されると言つてよい。

この両面の態度は、言うまでもなく、けつして矛盾するものでも両立しがたいものでもないが、また全く完全に覆いあつて整合一致しているものでもない。そのはたらきが現実に生じるところでは、両者が平等あるいは均等に作用していることはなく、必ずそのいずれかが優先もしくは優勢にその方向を決定している。そしてまた、この種の働きは、各個人において時により交替し転換し、優先・優位するところが変わるといふことも、もちろんあるが、これも各人平等にその体験の機会をそれぞれ折半的に均衡を保つて所有しているわけではなく、人によって、必ずそのいづれかに優位性があり、その人の性格・行動の決定にあずかつている。それが現実である。

それだから、人々の文学的興味や関心も、また主体的に文学を成立させる体験も、創造・制作の要求を核心にもつものと、享受・鑑賞の要求を基盤にすえるものと、そのいずれが有力であるかによつて様態がわかれる。〈文学史〉の追究の発足点において、この現実があることを忘れると、恐らく、〈文学史〉の成立の根拠を問うことができなくなるだろう。

文学的追究に限つたことではないが、総じて人文現象に属する事象の学的追究の構造の形式はどういうものか

というと、一般に、主体的総合的であるとともに、絶えず更新され深化される問題意識・課題追究態勢と、それに表裏して循環的に進展し透徹する客観的分析的な省察とが要素になる。その問題の発見と省察とが人文学Ⅴを中心的に所有する主体において実現するとき、いわば必然に人文学の学問Ⅴの成立が見こまれるわけだが、「文学を中心に所有する主体」というところに、人学問Ⅴ以前の素地が想定される。すなわち、先述した人文学Ⅴにおける二面のいづれかの働きがすでにあつて、その実質が問題の発見すなわち問題意識の発生と、相互に媒介的な契機として作用しあつている。これが作用していないようでは、その体験は架空のもので、本当の人文学Ⅴの研究はとても保障されるものではない。

つまり、人文学の学問Ⅴをあらゆる種の体験の、問題意識の面をかりにとりあげてみるとするならば、①より多くの人々が、より高いすぐれた文学作品を享受・鑑賞し、より深い美的体験の充足を求めるとはいかにして可能になるか、という課題が一つあり、また、②より多くの人々が、より広い文学作品ないし言語形象の産出にたずさわり、創造のよるこびをわかち合うことによつて、より高い文学体験を積みあげることはいかにして可能になるか、という課題がもう一つあるということである。①の観点において探索をはじめめる者は、方向として、高度の成就をとげた近代作品の一群に眼を向けるのが当然で、まずみずからそこに享受・鑑賞の美的体験を充足するための対象を求めて追究をこころみるのが筋道である。これに対して、②の観点において探索をはじめめる者は、もちろん、①の内容を排除するものではないが、方向として、至高度の作品どころではなく、作品と呼ぶことさえ困難であるような対象であっても、文学事象開拓の素材や契機たる意味をもつ営みにおいて成つたものがあるときは、進んでそれらをとりあげて追究をこころみるのが筋合である。

こうして、実質的に人文学の学問Ⅴの成立のことを考えると、上記の課題①と②とは、同等のものとは言えぬ。人文学の学問Ⅴの成立のためには、主体における文学的体験が前提となるというのは論のないところだが、ここでとくに注意を求めたいのは、他の場合はともかくとして、こと人文学史Ⅴの前提たるかぎり、文学における主体的体験というものを享受・鑑賞のがわの感動にのみ限定するのは誤りだということである。人文学史Ⅴをささえる文学の主体的体験の特質は、むしろ、制作・創造のがわの体験の支配的発動にあると認めるべき理由がある。唐突なことを申し出

ているように聞こえるかも知れないが、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ 研究というものが何か先験的な權威によって確保されているのかのように考えるのが基本的に誤りだとすれば、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ の本意に即して、その源にたち歸つて考えなおす試みは、つねに必要であろう。そこで、次のように考えてみる。

究極において、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ をあらしめるのは、明日の文学の開拓への意欲を主たるささえとしてであり、既成の作品の享受の歓喜を拡大する要求を主たるささえとしてではない。明日の文学の開拓のためには、もちろん既成の作品の享受・鑑賞の体験を素養にもたねばなるまいが、あえてそれにこだわるものでなく、先人の造形の営みの些細な事象のうちにも、微弱な働きのうちにも、いわば無意識な営為のうちにも、かれこれの事象相互の間にも、 $\wedge$ 文学 $\vee$ の開拓にかかわる有意性が認められるときには、それらを積極的に対象にとりあげるであらう。そこでは特定の作品の価値の決定の問題よりも、造形追求の、作品産出の契機の発見の問題が重要になる。その種のかそげき有意性の覚知とか、くすしき要素の発見とかいうことが、 $\wedge$ 文学 $\vee$ における主体的体験として成立するところに、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ の探索が約束されるのであらう。それ以外に、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ を結果する正当な筋道を考えることはできない。

さて、これは言い過ぎであらうか。なお、必要な点を省みておきたい。

☆

繰返して言うが、「究極において、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ をあらしめるのは、明日の文学の開拓への意欲を主たるささえとしてであり、既成の作品の享受の歓喜を拡大する要求を主たるささえとしてではない」であらう。

しかし言うまでもないことだが、こう説くのは、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ の探索が第二のゲーテやフローベールや紫式部や芭蕉やを生み出すために計画されることだと考え違ひをしての上のことではない。これらの天才の出現は、いわば絶対的偶然に属する事がらと考へるべきで、学問や研究の成果に依拠するところではない。学問としての $\wedge$ 文学史 $\vee$ の追究に期待し得るものは、文芸作家・詩人の産出という事態ではなく、大衆の言語活動における創造性の開拓ということ、庶人における言語形象産出の体験の累積ということ、そしてそれらを実現に結びつけるための条件の確保、さらにいえば、 $\wedge$ 古典 $\vee$ をより広く、より多く、そしてより深く共有するという事態の実現に向けての基幹作業

ということなのである。

△文学Vにおける創造・制作がわの体験をおしひろげて考えるとき、万人衆庶にそなわる評論的活動の要求を無視ないし軽視する従来一般の観点は、まことに不用意なものと言わねばならない。衆庶における享受・鑑賞の体験も、ただ一方的に受容の体験に終始するということは、厳密には、絶対にあり得べからざることである。そこには、あらたまって△評論Vと称すべき活動は認められなくとも、何らかの言語表現につらなる意識や態度は生じている。ある意味では、「声なき声」というものだが、それを顕在化させるのが人類の本意であり、それにつらなる課題が△古典Vの共有ということである。もしも文芸作家・詩人の産出ということを考えるのなら、これらの条件の備わりにもなつて、結果としてもたらされることは期待して然るべきところだろうが、それはどこまでも目的や目標に掲げるべき事項ではない。

さて、それならば、学問としての△文学史Vの追究が、どのような仕組みで大衆庶人の言語活動の創造性の開拓に具体的に結びつくのか。この答案を単簡に書きあげるのは容易でないが、概括的に言えば、歴史上各時代を通して、地理上各地域にわたつての、多数の人々の享受と評論との実績の証人たる意味をもつところの△古典V、それらの文化財(作品)が△古典Vとして成立したメカニズムをとまほぐしてゆく、その経過をたどることによって確かな契機を解明し位置づけるのが主要な仕事とならう。それは「近代的な自我による今日の歴史」を求めると称して△古典Vの否定や解消をはかる流儀とは、むしろ正反対の向きをとるものである。

☆

それにつけても、主体における文学的体験と、主体を超越する意味を含む△古典Vなる存在との関連性はどうかとらえておくべきか。だいたい、△文学史Vに意味ある文学事象として特定の作品をとりあげる場合、顧慮される主たる事項は、その作品自体が文学作品として産出されたものであるのかどうか、あるいはそれは別としても、それをとりあげる当事者がそれを文学的体験において受容し得るものであるかどうか、そのいずれかにあたるものだとするのが従来一般の通念であった。すなわち、その当の制作者か当の享受者における文学的体験をこそ基準となすべきであ

り、それ以外の第三者的条件がいかにかこれを文学的事象たることを主張しても、それを理由としてこれを $\wedge$ 文学史 $\vee$ にとりあげるの筋が立たぬということなのである。これは原則としては、理由のある一つの建前だと言えるだろう。

ただ、このことを重視するあまりに、その当の本人（制作者側にせよ享受者側にせよ）において何らかの文学的体験が存している場合にも、いつも必ず第三者の文学的体験は度外視しなければならぬことがらであるように思いとっている人々が意外に多いのは、警告は正を要する点だと思ふ。ことに当面の問題として、研究者本人において、特定の作品なり文学事象なりについて、何らかの文学的体験が成立している場合には、過去の各時代を通じて積まれてきた多くの人々の観照・享受・評論の実績は、その作品なり事象なりを $\wedge$ 文学史 $\vee$ 上にとりあげることを確定する上で、実はむしろ決定的な準拠の意味をもつものだとすることを失念してはならない。

その理窟を簡単にのべておこう。どのみちわれわれは、いかに渾身以てつとめても、またみずからを深く恃んでも、 $\wedge$ 文学 $\vee$ における絶対的価値の産出もしくは評価を直接かつ完全に掌り決することは不可能なのだから、相対的なものをどれだけ積みあげて絶対的なものに近づけ得るかという可能性を、それぞれ何分かわかちもっており、ただそれだけだということを忘れてはならぬ。されば $\wedge$ 文学史 $\vee$ の探究とは、 $\wedge$ 学 $\vee$ の名においてする、その最も積極的な、典型的な営みとしてとらえられるべきである。

いかにも、 $\wedge$ 文学 $\vee$ の感性的・官能的な享受にすべてをかけようとする人々から言えば、相対的な価値の追求の積み重ねなどいうことは、滑稽の沙汰としか聞こえぬであろう。エロスの饗宴、それはそれでよろしいのだが、ひとしくみずから $\wedge$ 文学 $\vee$ の感性的享受を体験するにしても、それ以外のことがらについて斟酌勘弁するのを滑稽に思う人と、それを滑稽とせず、史的事実として存する文学的事象の中にも共感共鳴の要素を見出そうとする人と、その両者の違いが $\wedge$ 文学史 $\vee$ の探索をあらしめぬかあらしめるかの差異になってくるのだから、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ のことを論ずる限りにおいては、このけじめはすこぶる重要な意味をもつ。エロスの饗宴に明け暮れる人々には、 $\wedge$ 文学史 $\vee$ はあり得ない。

自分以外の、有名無名を問わず、いかなるそしていかに多数の人々が特定の文献を文学的事象の意味において取扱

ったとしても、それが∧文学∨の成立を保障するものでないということは、本来自明のことからであって、あらためてことごとしくとりあげる必要もないほどのことなのだが、それを無分別に拵けて、そういう事実——有名・無名の多数の人々が文学的事象としての意味を認めたという事実——がすべて無意味で無視すべきだというふう置き換えられることになると、∧文学史∨が成り立たなくなることは必定である。先人の実績を肯定することなしに古典を∧古典∨とすることが不可能であるのは明白なことからあり、その点を確認するだけでも、前に述べた「∧古典∨を立てる」ことが、基本的に、そしてむしろ積極的に、諸作品ないし諸事象に対する先人の評価の集積を、あるがままにそして正当に尊重する立場につらなることを是認しなければならぬ。その意味において、∧古典∨の場合は、「そこに山があるようにある」ということも、許されてよい。すなわち、対象は、ある程度客観的に測定される状態において「ある」のである。

そういう∧古典∨は、当然、単数ではなく複数ある。しかし研究者における、複数の∧古典∨についての∧文学∨の体験は、決して均一ないし同等のものではない。しかしそれらの相互の間には、衆庶の造形的要求の実績というみで、さまざまな有意的脈絡がある。∧文学史∨は、その追究において成るのである。

☆

わが恩師久松潜一先生は、「文学・語学」誌第七六号に寄稿された最後の論文において、ここ十数年来顕著になつたいわゆる微視的研究について、ただ微細な研究であるにとどまることなく、それが「文学の本質につながり、文学史の研究に結びつくようであつてこそ意義がある」ということを指摘されるときに、戦後は微視的研究がさかんになつて、∧日本文学史∨はもとより、各時代や各ジャンルの和歌史とか小説史とかいうものも一人で書くことはほとんど行われなくなり、久松先生がおひとりで『日本文学評論史』や『和歌史』を書かれたのも「今では古風な研究態度になつてしまつた感がある」と嘆じられ、さらに今後も国文学者によって創意のある∧日本文学史∨が書かれることを望むと説かれた。

久松先生が、究極的に∧日本文学史∨の追究を志して居られたことは、疑いの余地がないと思う。しかし、先生の

志向される。日本文学史Vすなわち文学の本質につながった。日本文学史Vがどのようにして可能になるのかは、先生ご自身が、実践的に証明なさるより仕方がなかったというのが現実である。先生は、たしかにそれを敢行された。

このような、言わずもがなのことを言い出したのは、実は、おおけないことながら、久松潜一先生の『日本文学評論史』の学史的な深い意義について、私見をのべたからである。先生は、昭和二十七年に弘文堂から出版された『日本文学史上』の序で、

日本文学史の研究は私にとって生涯の課題である。日本文学評論史も結局は日本文学史の研究への礎石であるとも言へる。……一貫して日本文学史のしっかりとした体系をきづきあげることが、いつの日にも実現されるか分らない。

とはっきりのべて居られる。先生は、日本文学史V家たることを生涯の目標としておいでだったのだ。

ところで、『日本文学評論史 古代中世篇』においては、日本文学史Vと日本文学評論史Vとが、非常に密接な関係にあることを認めながらも、なお「評論史の可能と限界」にあえて言及され、

学問的な組織の対象として扱ふ場合に決して一方は一方の従属ではない。文学評論史は文学史から独立して存在することが出来るとともに、文学史の領域までも冒してはならないのである。

と、文学評論史の守備範囲を限定して臨まれた。そのうえで、ご自身も認めて居られるように、日本文学評論史をずっと中心課題として追究して来られたのであった。

先生のお考えによれば、日本文学評論史は、日本文学の日本研究史Vの中心をなすものであったはずである。それを確認して、『日本文学研究史』の序文において、

私には日本文学史を扱ふにも研究史を離れては考へられないのである。

と説いて居られるのを知ると、先生のご本意がわかるような気がする。

先生の『日本文学評論史』の追究は、いわば日本古典Vの存在の証明手続であり、そのいみで日本文学史V保障のための作業であったのだ。文学研究史に属する諸事象のうちから、文学評論に係る要素を抽出し事項を選別して、古典確認の条件をととのえられたものと言える。その先生の志向は、批評基準の追求という点によくあらわれていると思

う。

批評基準の相違による評価が異なって来るのを、それとして認めることも一の態度ではあるが、批評の普遍性を求めることからいへば出来るだけ評価の共通性を求めてゆくことも必要であらう。万葉集の批評基準でいへば、時代により、流派により、人によって異なる基準を分析して、そこにどういふ点が異なつてをり、どういふ共通点があるかを明らかにしてゆくことによつて、批評基準にある不易性と流動性とをはつきりさせることが必要になつて来る。(「万葉批評史の一問題」万葉集とその前後所収)

と説かれたのもそれだが、實質的に八古典Vをあらしめるための条件をつみかさね、要素を確保する努力が、先生のお仕事の中心的部分にあつたことは明らかである。

☆

久松先生は、「日本文学研究の回顧と展望」という座談会において(「古典と近代文学」第七号(昭45・7月、有精堂)所載)、小学校から中学校の段階ですでに「少年文学でも書こう」と思われたこと、中学校のときに『方丈記』を中心とした文を書かれたこと、高等学校二年のときにモーパッサンの『ペラミ』と比較して「源氏物語の女性」という三〇枚ほどの文章を校友会雑誌にのせたこと、その他のことを述懐して居られる。先生の国文学研究の刺衝の中心に、創作的要求があつたことは疑いなく、それが八文学史Vへの志向をささえて変わらなかつたのだと思う。

先生は、しばしば八日本文学精神Vという追求目標を掲げられたが、はやくから歴史的風土的基盤ないし背景を重視されたことも、このことと関係が深いと言える。八文学Vにおいて歴史性風土性が問題になるのは、その形象を形成の面からとらえるときであり、それも、素材・形態・表現・様式等について類型的なものの意味・積極性を明らかにしようという観点をとるときである。文芸作家や詩人の制作活動ばかりでなく、大衆の言語活動における創造の可能性ということに関心をつなげるとき、この種の観点は欠くべからざるものとなる。久松先生の国文学者としての志をうかがうべき点で、これが文学評論史と表裏しているのである。久松先生の八日本文学史Vことに通史としての八日本文学史Vへの取り組みはきわめて本格的なものであつたので、余人の企て及ばぬ、そして先生にしてはじめて



可能なやり方で、国文学を方向づけるといふ偉業を果たされたのである。

——私情にわたって恐縮であるが、わたしは、公表する論文等においては、久松先生と記したことは、今まではほとんどなかった。それは、わたしにとっては大事な先生でも、読む人にとってはそうでない場合があるからである。しかし、今回は、ごく自然に、先生と呼ばせていただく。なお、△文学史▽の方法等に関する私見は、近いうちにまとめてとりあげたいと思っている。